

巻頭言

悠久の時を見据えて

仏教文化研究所編集委員

蜷川祥美

近年、岐阜市で居館跡の発掘調査が行われたことから、織田信長をクローズアップしての町おこしが盛んである。織田信長といえば、彼がよく舞っていたという幸若舞「敦盛」の一節が思い起こされるであろう。

人間五十年、化天（下天？）のうちの比ぶれば、夢幻の如くなり

一度生を享け、滅せぬもののあるべきか

これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ

この一節のうち、「人間五十年」を、人間の寿命を指すと解釈する方もあるようだが、『大智度論』には、復次四天王寿命五百歳。人間五十歳。為四天王処一日一夜。

とあり、欲界の六の天上界の最下層である四天王天の一昼夜が、人間界の五十年にあたりと述べられている。

さらに、『阿毘達磨俱舍論』には、

人間五十年 下天一晝夜

とあって、一昼夜が人間界の五十年にあたる世界を「下天」と表現しているので、欲界の第五天である樂变化天、略称「化天」ではなく、第一天の四天王天、略称「下天」での解釈が妥当であろうかと思う。

つまり、この「敦盛」の一節は、人間界の五十年の年月は、天上界の四天王天の一昼夜にしか過ぎないのであるから、夢幻のように一瞬のものである。一度生を受けた者は、一瞬一瞬変化し続け、かならず滅びるという諸行無常の道理をこころに刻み、一刻もはやくさとりを求めるところをおこすべきだという意なのである。

ところで、法相宗では、菩薩が仏となるための修行期間を三大阿僧祇劫としている。阿僧祇とは、「無数」の意だから、さとりを得るにははてしない期間が必要であるということを示しているのである。記録に残る現代人の最高齢は百二十二歳だそうだが、たとえ、わたしどもが百歳以上の寿命を得たとしても、とうてい三大阿僧祇劫には及ばない。そこで、菩薩は、さとりを得たいと願うところと無漏のころころによる禪定によって、天上界で長時の寿命を得て、はてしない期間の修行を完成させようとするのである。

このように考えていくと、人間界の五十年のいかに短いことかと希望を見失いそうになってしまう。し

かし、鎌倉時代の法相宗の学僧である良遍は、『法相二巻抄』で、

抑三大僧祇ノ修行ノ久シサハ、アジキナク候ヘ共、覚リノ前ニハ是ヲ一刹那ニオサム。

と述べている。さとりを求める菩薩にとって、三大阿僧祇劫の修行期間はあまりにもはてしなく、実現困難なように思えるが、いざさとりを得る直前になってみれば、一瞬のところに収まってしまうものなので、希望を失うことなく修行にはげむことを勧めているのである。

また、本学とゆかりの深い浄土真宗では、阿弥陀如来の本願を疑いなく信じることによって、菩薩の修行などかなわぬ凡夫が浄土に往生するのだと説かれている。阿弥陀如来は無量寿如来とも称されるので、凡夫がはかり知ることのできない寿命をもつ如来のところに逢うとき、浄土往生が定まり、浄土往生の後には永遠の寿命をもつ仏になれるというのである。

これは、さとりを得るといふことは、永遠の寿命を実現することでもあるので、限られた短い寿命しか経験し得ない凡夫であっても、无量寿如来のところに逢うことで、永遠の寿命を志向することができる、もしくは、志向すべきであると教えてくれていることではなからうか。

昭和三十七年（一九六二年）十二月の設立認可、翌年四月の岐阜南高校の開校をかきりに、県下唯一の総合学園としての歴史を歩んできた学校法人聖徳学園は、平成二十五年に創立五十周年の節目を迎えることとなった。その歴史のうち、平成十二年（二〇〇〇年）十月二十六日に開設された仏教文化研究所、さらには、本号でようやく第十三号の発刊となる『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』の歴史の長短

への評価は、各人のお考え次第であるが、永遠の寿命をもつ仏のさとりを志向すべく、悠久の時間を見据えて、一步一步着実に研究活動を推進していくことが私どもの使命であると考ええる。

平成二十五年（二〇一三年）三月